

やすらぎ



「歎異抄」 第十三章 続き

そのかみ邪見におちたるひとあつて、悪をつくりたるものを、たすけんとし願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて、往生の業とすべきよしをいいて、ようように、あしざまなることのきこえそうらいしとき、御消息に、「くすりあればとて、毒をこのむべからず」と、あそばされてさうろうは、かの邪執をやめんがためなり。まったく、悪は往生のさわりたるべしとはあらず。「持戒持律にてのみ本願を信ずべくは、われらいかでか生死をはなるべきや」と。かかるあさましき身も、本願にあいたてまつりこそ、げにほこれそうらえ。さればとて、身にそなえざらん悪業は、よもつくられそうらわじものを。また、「う

「歎異抄」(第三十一回)

標 暁 講述

みかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とりをとって、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田鼠をつくりてすぐるひと、ただおなじことなり」と。

(真宗聖典六三頁〜六三四頁)

悪をこのむということ。故意に悪をしてそれを往生の業とする。これはまったくの邪見である。悪をこのんではならない。しかし、悪を畏れる必要はない。ここが誤解を招いて混乱しているため、はっきりと本願を立てて知っておかなければならない。我々の身に付いている煩惱具足と罪悪深重という悪を畏れる必要はまったくない。それは本願があるからである。しかし、本願があるからといって、このんで悪をつくるというのはよろしくない。戒律を持つこ

光照寺寺報

発行所
宗教法人光照寺

〒331-0821
さいたま市北区別所町102-2
電話：048-651-2781(代)
FAX：048-651-2753
E-mail
yasuragi@beige.ocn.ne.jp
ホームページ
http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji

発行人
池田孝郎

としてそうせざるを得ないところで生きている。これは、庶民の職業生活の中にこそ、救いが実践されるのが浄土真宗だということを頭わしているのである。この現実をみて、宿業ということは、善悪の問題ではなく、縁によって受けていかなければならないことだということを、自覚させてもらうことが大事であると云われている。あくまでも自覚的な問題である。

(当寺)法話抜粋要約、文責副住職 釈徹照) 次回へ続く



修正会お斎の様子



子ども会 坊守の紙芝居

春季彼岸会法要

三月十日(月)二時三十分厳修

詳細は三頁

む げ こう 無 碍 光

一凡夫が仏になる法一

住職 池田 孝郎

昨年こぞの夏は暑く、この冬は大雪が降り寒い冬となり、気候変動の激しさを実感するものです。
この現象はチリ沖の海水温度のわずかに一、二度の変化が、エルニーニョ、あるいはラニーニャ現象として現われ、偏西風に影響を与える様です。今年のこの大雪はラニーニャ現象により、ヒマラヤ山からの偏西風が少し変化して、日本列島に寒気団がまとともに、日本海より吹きつけることの気象現象とのことです。
自然界の少しのズレ、変化が大きく現われ、実感として体感する

ことは驚くほどです。
特に毎年感ずるズレは、太陽が南から戻る冬至より、年明けて、小寒、大寒として寒さが厳しくなる現象です。太陽が戻るならばすぐにでも暖かくなれると思うのですが、そうではなく、ズレて現われることです。今回はこの「ズレ」、「揺らぎ」から、文字、言葉の意味の「ズレ」、「揺らぎ」を考えつつ、「人間」の存在について肉迫し、間近に迫ってみようと思います。
私はこのところ、「おのずから」と、「みずから」の日本語の不思議について考えていました。それは「自ら」と漢字で書けば、どちらに皆さんは読むでしょうか。ある人は「みずから」と読み、ある人は「おのずから」と読むでしょう。大変な違いであります。
そんな問題意識をもっていたところに、新聞の広告欄に、「おのずから」と「みずから」——日本思想の基層——と題して、東京大学名誉教授の竹内整一先生が本を出版していることを知り、早速取り寄せて読んで感動いたしました。「おのずから」と、「みずから」の「あわい」という言葉でありました。この「あわい」は「淡い」ではなく、「間」(旧字は間)という

と物、時と時のあいだ、すきま、あいま。又、人と人との組み合わせ、人間関係、間柄とありました。この「あわい」が日本人の思想の根底に基層として、意識、無意識に用いていることに気づきました。私が仏法的に解釈すれば、「おのずから」は「法」(阿弥陀)、「みずから」は「機」(自己自身)、「あわい」は「出遇う」(如来と自己が値遇する)と頂けます。これこそ、「浄土門」の中の「浄土真宗」ではないか、と驚き、感動いたしました。門構えに月と日も面白い。「人間」の文字の由来は恐らく、「天と地との間」の存在を意味するのではないかと。仏法では「六道」を説く中に、「地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天」とあり、「修羅と天」の「間」に「人」と位置付けられていることです。人間はこの六道の間を彷徨うて、迷って、へめぐるっているものでしょう。人間は間柄的存在ともいわれます。大いなるもの、「如来」と、愚かなもの、「私」との遭遇する存在が「人間」という間の存在なのでしょう。
もう一歩踏み込んで表現すれば間として、物も人も、否、一切自然界、否、宇宙の存在まで間柄として仰ぐことが出来ます。經典に「人非人」とあり誠に不思議です。

真の依り処

あなた今のままでいいのですか？

幸せですか、楽しいですか、不満ありませんか、愚痴も出ませんかと我に深く聞いてみると皆様一人一人の思いが出てくると思います。

人が人と思う心、それが愛でしよう。人は一人では生きられません。人は人生という道をつくります。ただ自分が体験した少しばかりの経験をもとに自分の都合で善悪にふりまわされて六道輪廻し、地獄におちてしまっているのです。ありがたうごめんなさい、許して下さい阿弥陀様とお念佛せずにはいられません。健康で働ける環境にある方も安心ばかりしておられません。一寸先闇です。不安なく生きている人もいやでも最後は死の不安があります。自分の死に直面するのです。その死の不安を乗り越えて安心の浄土の世界を聞法によって感動させていただいております。

岡田ノリ子

鈴の音

聞法とは私の「考え」の物差しが教えによって問い返されること

池田 勇諦
〔真宗の実践〕

春季 彼岸会法要

- ・3月21日(月) 春分の日
- ・午後1時30分
～3時30分まで
(1時受付)

- ・光照寺本堂にて
- ・勤行・法話

※準備の都合上、出席人数をご連絡下さい。
預骨されている方は率先してお参り下さい。
ご参詣をお待ちしております。

彼岸参り

- ・3月18日(金)
～24日(木)の期間
(但し21日は除く)

※ご希望の日にちをお知らせ下さい。時間につきましてはこちらで調整させて頂きます。ご自宅か当寺のいずれかで読経いたします。

お彼岸



昨年のクリスマスに群馬県にある児童相談所にランドセルが届けられたことから端を発して、全国各地の児童養護施設などにランドセルや現金などが届けられるということが話題になりました。届け主は漫画「タイガーマスク」の主人公と同じ「伊達直人」と名乗り、「タイガーマスク現象」と称されて社会現象を巻き起こしました。この話題でテレビのコメンテーターは「このような善意の輪がどんどん広がっていくと日本は良い。キ

ツカケさえあれば日本人は善行をするもの」と話していました。また、喩えとして、ペットボトルに入れた水をゆつくり冷やしたものに衝撃を与えるとみるみるうちに凍っていく、「過冷却」の現象のようだと話していました。

私はこの「キツカケさえあれば」という言葉が妙に頭に残り、また、「過冷却」の現象が「お念仏の広がり(真宗興隆)」と結びつかないだろうかということを咄嗟に思いました。「人生の悲哀」に遭うことはお念仏申す大きなキツカケであり、「教え」があり、「教えを聞く場」があるということは「過冷却」現象が起こると思えるのですが、現実実はそう簡単なことではありません。『歎異抄』(後序)で親鸞聖人は「弥陀の五劫思惟の願をよくよ

ひとくち 歎異抄

羅漢：浄土門のさとりととは。
「今生に本願を信じて、かの土にてさとりをばひらく。」第十五章



浄土真宗の教えは、人間の価値観を翻した処、即ちかの土のさとり。

川越喜多院の五百羅漢



子ども会 焼き芋とけんちん汁



三輪さんの絵本の朗読



焼き芋まだかなあ

く案ずれば、親鸞一人がためなりけり」と御述懐されておられていますが、この一人ということ、私一人のために弥陀の本願が説かれていたと頷かれることが大切だと感じています。

亡き人を偲びつつ「一緒にお念仏しましょう。副住職(釈徹照)



寺務所より

◆法要のご案内

●春季彼岸会法要

三月二十一日(月)、午後一時三十分より厳修。

◆光照寺護持会

会員の方は護持会費の納入をお願い致します。又、随時新会員受付中。別紙案内をご覧ください。

◆聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会

毎月開催。午後一時半～四時半まで。講師は櫻曉先生。和讃を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

●大經の会

二月六日、三月十三日、四月十一日、五月三十日、午前十時～午後三時まで。細川巖著正信偈讃(四)を学んでいます。お弁当持参して下さい。

●我聞の会

二月十五日、三月四日、四月十九日、五月十二日、午後二時～四時まで。真宗の簡要を学んでいます。講師は住職。

●微風学舎

毎月開催。午後七時～九時まで。講師は副住職。「顕浄土」の教学を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

◆宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌

法要参拝。

三月二十五日～二十七日。

俳句・川柳

吉澤 光昭

雪だるま溶けて目鼻の炭三つ
何よりの馳走となりし炬燵かな
もう慣れし夫のつまみの海鼠切る

西木 順子

冬木春までわれは一夜の眠りかな
絮か虫か宙をわたれり冬薔薇
霜の棘きらきらほうれんそう緑

花岡 要

赤切れの我が手の指よ年暮るる
信濃より歳暮の味噌の届きけり
うとうとと生死の外や日向ぼこ

河野 日出子

冬木立地に舞ふ枯葉の淋しげな
包みてよ来し方悲喜を歳暮の月
南天の味き実きらり軒日陰

小さき額を傾けて目白何思ふ

紅梅も蠟梅も咲き春隣り

江部 良吉

大寒や合掌念佛ひたすらに
牛舎跡うごく形に雪積り
地震の地の生活たしかに雪ねぶり

(雪ねぶり)春先の陽気によって

でるもや

古里の雪踏む音を連れて来し

風花のこちへこちへと弥陀の橋

釈 義深

窮しても通じましたよ皆の衆
喉もとを過ぎたら元の地金でる
お浄土を南無阿弥陀仏願います

短歌(詩)



佐々木玄吾

速歩きスキップ歩きとりませて風邪
の予防に公園歩く
免疫力アップめざして五千歩を歩けば
ファイト内からおこる

佐藤 セツ子

挽歌(故人を哀悼する歌)

孫達の創りくれたる折り紙の鶴に埋
もれて息子は逝きし
折りづるに埋もるる顔は冷たかりゆ
つくりゆつくりなでつつおれば
はらからの集い法要進みゆく若く
逝きたる君を惜しみて

朝夕をにぎ子子の為にコーヒーを淹れる
夫に香りまつわる「悲しい歌ばかりですね」と友は
言う寂しさ胸に日々生きゆかむ

河野 日出子

冠雪の気高き富士を望む時わが子よ
生きてほしかった
マフラーに身に染み風を包み入れ春
が来るまで遊ばせようか
人の世の幾多の憂いなかりせば冴え
澄み渡る冬空の如 憂いありてなお
人の世は楽しからずや

篠原 潤子

ビルの谷間真昼の半月ボツリンとた
んだだま一つて白く輝く
鼻の穴下をむいてる鼻の穴ドシヤ
プりの雨入らぬ鼻穴
素の自分たぐり深いウソつかない
あるがままにだこれでもいいのだ
お正月布団が足りず銀色のキャンプ
シートに雑魚寝する我

嫌なことおきれば自分をかえりみて
自分が悪いと思えばナア:
捨てられぬ認められたいそのココロ
自己顕示欲の塊のわれ
絵手紙がメールや電話よりもなお
うれしいと言う片麻痺の女性

梵鐘



花岡 要 画

光照寺二〇周年の記念すべき
報恩講が終わり、今年は親鸞聖
人七五〇回御遠忌を迎える節目
の年となる。近年、政治も経済
も不透明感が漂い、「生きづら
い」という言葉を聞く。家庭か
ら国家間に至るまで損得、勝ち
負けといったプラス、マイナス
の二極で物事を見て心が休まら
ない。努力して上手くいけばい
いが、結果が思うようになると
は限らない。自分が良いと思っ
た行為が自分以外のものにとつ
て必ずしも快いとは限らない。
思うようにならないのが現実で
ある。それと同時に誰もが本当
のものを心の奥底で求めている
のではないだろうか。

本山への参拝、聞法会と集う
機会がたくさん用意されてい
る。これこそ好機である。多く
の朋友と出会い共に語り合い、
法を訪ねる中で見えてくる世界
がある。命とは、自己とはなに
か。本当のものを求め、問うて
みよう。

釈 義深